

Close Up **老健**

介護老人保健施設 鴻池荘

奈良県御所市



施設外観

開設から変わらぬパイオニア精神で 地域の在宅復帰・在宅療養をサポート

奈良県中部に位置する御所市は、5世紀頃には古代豪族葛城氏の本拠地であり、金剛山と葛城山の麓の高台は神々を祀る聖地だったとされる。また江戸時代に入ると陣屋町として発展してきた歴史のあるまちである。今回は同市にある老健施設「鴻池荘」(医療法人鴻池会。平井政規理事長。入所：162名、うち認知症専門棟50名、通所：100名。サテライト型入所：29名、通所：55名)を紹介する。

葛城山から、鴻池荘のある御所市を望む

老健 2025.10 ■ 3

奈良県第一号の老健施設 昔もいまも地域ニーズに応える

金剛山と葛城山が南北に連なる山麓には棚田、北部の幹線道路や駅周辺には市街地、南東部には盆地や平野が広がる御所市は、『古事記』や『日本書紀』にも登場し、神々の降臨した地との伝承もある。江戸時代には交通の要衝、商都としても栄えた。2025年現在の人口は2万2,046人で年々減少傾向が続き、高齢化率は45.1%と全国平均より高い。

「鴻池荘」は、1988年に開設された奈良県で第一号の老健施設である。「今後は高齢の患者がますます増えてくると考えた先代理事長が、秋津鴻池病院の一部に開設しました。開設当初から先代は、『在宅復帰を意識しないといけない』と感じていたそうです」と、平井政規理事長。

開設した1980年代の後半といえば、高齢社会を見据えて老人医療・福祉の分野で、高齢者の社会的入院への対応として、急性期と在宅の「中間施設」の役割に関する議論が成熟してきた頃である。

先代理事長はじめ鴻池荘の職員は、ケアに携わるなかで、「老健施設は、果たして中間施設だけの役割なのか?」という疑問を強めていったという。「地域の方々にいかに在宅で暮らしていただくか」を追求していくうちに、自然と「中間施設だけの役割ではない」と考えるに至ったそうだ。鴻池会の法人理念には「ご利用者の立場に立って、医療、保健、福祉の総合サービスを提供し、地域の皆さまがたの自立を支援します」とある。「自立」が声高に叫ばれ、明文化されるよりも早い段階から「自立」を意識していたこと、在宅復帰施設という老健施設の役割を認識し、地域のニーズにできてきたことが同施設の沿革からもわかる。

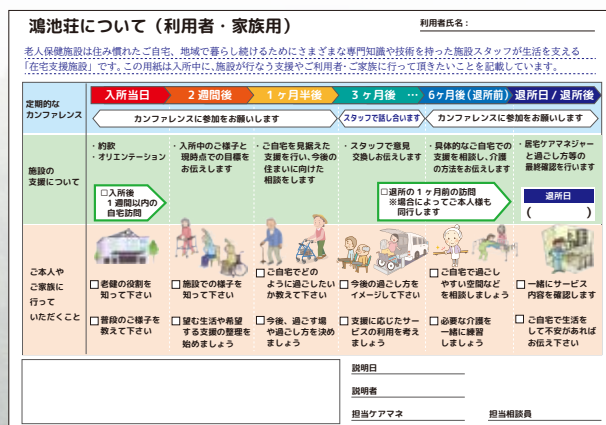


平井理事長

現場主導でさまざまな取り組みを実施 ボトムアップで進化する

平井理事長は「歴史を大事にしつつも、多様な意見を取り入れ、新たなものを生み出している施設という自負があります」と述べる。制度に左右されることなく、地域から何を求められているかにつねに耳を傾け、施設の改革を進めてきた。その積み重ねが、超強化型の種類の維持につながっているのだろう。

図表1



①金剛生駒紀泉国定公園にある葛城山ロープウェイ。葛城山上駅の展望台からは、大和盆地や大和三山の眺望が楽しめる。②御所市には大小の古墳が点在する。写真はキトラ古墳（奈良県高市郡明日香村）。③吉祥草寺（きっしょうそうじ）は、修験道の開祖、役行者（えんのぎょうじゃ）の開基と伝えられる。④葛城一言主（ひとことぬし）神社。本社の一言主大神は雄略天皇が葛城山で狩りをした際に顕現したと『古事記』に伝わる。

その一例が「在宅復帰パス」(図表1)。「必要性を感じた施設のケアマネジャーが発信して構築された鴻池荘独自のツールです」と近藤大樹相談課課長。多職種協働を支援する仕組みとして作成され、入所前から退所後までの流れや手順が見える化されている。カンファレンスでも活用しているそうで、利用者と家族、多職種間での情報共有がしやすくなった。定期的にミーティングし、在宅復帰パスはつねにブラッシュアップされている。

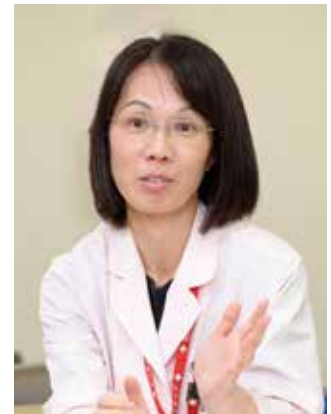
「医師・看護師・リハビリ専門職・介護職・歯科衛生士・管理栄養士などによる『食』のチームケアも行っています」と都築尚子^{つづきしゅうこ}栄養科課長。多職種が連携し、利用者一人ひとりに合った栄養ケアを実践しているそうだが、そのとき活用している「摂食嚥下障害ランク表」(図表 2) も鴻池荘が独自に作成したもの。言語聴覚士が表に基づいて嚥下機能を7段階で評価・判定し、安全かつ食べる楽しみのある食の支援をチームで行う。

2012年頃からサブワーカー、いわゆる介護助手も導入している。当初はシーツ交換業務から始まったが、その後、介護職の業務を直接介護と間接介護、

図表2

[illegible]

近藤相談課課長



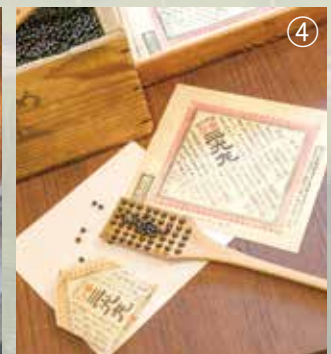
都築栄養科課長

さらに専門知識が必要な業務以外にも仕分けして介護助手へタスクシフトをしてきた。いまでは介護助手も介護の周辺業務を担う不可欠な職種となっている。

1996年開設の認知症専門棟では「認知症のご利用者の言動の背景にある気持ちや原因を知るために『ひもときシート』を活用してきました。2024年度からは『BPSD25Q（認知症の行動・心理症状質問票）』も導入してケアの見直しをしています。精神科医の回診に多職種が同行することもそうですが、すべてはご利用者がその人らしい毎日を過ごせるようにするため。生活歴に沿ったケアを実現できるよう心がけています」と杉本正徳介護課長。

また山本江吏子リハビリテーション部課長も続ける。「認知症への予防・啓発に力を入れており、地域連携の取り組みとして『認知症予防教室』を開催しています。10名程度の地域住民を募り、4回1クールの講義と草細工や俳句などの活動をとおして『もの忘れ』に不安を感じる仲間との交流を楽しみ、教室終了後も地域のなかでの役割活動や外出・交流機会の拡大につなげ、認知症を予防する生活習慣の構築を図っています」。

これらの取り組みは、現場主導のボトムアップで生



①旧御所町にある「御所まち」は、江戸初期につくられた陣屋町。交通の要衝として栄えた当時の町並みが保存されている。写真の「高札場」は日本風景街道事業の一環で復元された。②・③油長酒造は、1719（享保4）年創業の老舗。1998年から秋津穂米を用いた日本酒「風の森」を販売している。④商都でもあった御所は、地方への菓の行商も盛んだった。「三光丸」は、約700年前（鎌倉時代後期）からつくられていた和漢胃腸薬。



杉本介護課長



山本リハビリテーション部課長



福本事務部長



杉本看護部副部長

まれ、実施されているもので、福本美和事務部長は「ご利用者の立場を鑑みて仕事にあたる、職員皆の関わりでつくりあげられてきたのが、いまの『鴻池荘』なのだと思います」と話す。

組織の見直しによって 多職種協働が自然と強まった

利用者を真ん中に、各職種が専門性を発揮しながらチームとしてサービスを提供するドーナツ型の多職種協働は、老健施設の理想とされる。鴻池荘は、どのようにしてその理想形を実現してきたのだろう。

杉本敏彰看護部副部長は、「2013年に組織が見直されたことがきっかけ」と振り返る。前述のとおり鴻池荘は病院内に開設されたため、当初は病棟が1つ増えたような感覚で看護職がトップ、介護職はサブという認識が強かった。ところが2013年8月に組織改編が行われ、介護職が施設のフロア責任者を担うこととなり、看護職と介護職はフラットな関係になった。

「従来は介護職が看護職に伺いを立ててから動く感じでしたが、おのおのが専門性を存分に発揮できる対等な関係になったことで心の距離も縮まったのではな

いでしょうか。どの職種も垣根なく仲がよいからこそ自然と多職種協働が実現しているのだと思います」と杉本看護部副部長。

松原奈津子看護課長は「詰め所にいてもいろいろな職種がそばにいる安心感があり、互いにリスペクトし合っているのを感じます」と話す。

山本リハビリテーション部課長は「問題が生じてもどんな場面でも『利用者の立場に立って』力を結集できる、絶対ぶれない軸があるんです」と続ける。

同施設は、2023年に「介護職員の働きやすい職場環境づくり厚生労働大臣表彰奨励賞」を受賞しており、多職種協働のチームケアが盤石の体制のもとに成り立っていることが窺える。

専門性を最大限に活かし 質の高いケアを生み出す

笠松宏記介護課長が「看護と介護がそれぞれの専門性を最大限に活かしている」と紹介してくれたのが2009年開設の介護老人保健施設鴻池荘「サテライト^{せいらい}蜻蛉」だ。

当時ベッド数拡大計画がもち上がったが、鴻池荘に



①情報共有は多職種協働に欠かせない。眠りスキャンのデータをもとに介護・看護・リハビリ専門職がカンファレンスを行う。②TQM (Total Quality Management) 活動を行い、サービスの向上を図る。③2023年度から特定技能や留学生アルバイトを採用。スリランカ出身のディルギさんは特定技能で入職。施設の戦力の1人である。④2018年度から移乗サポートやシルエット見守りセンサーなどの機器を導入、業務の効率化を進めている。



松原看護課長



笠松介護課長



西田リハビリテーション部部长



植田事務課長

十分なスペースがないため、車で約5分の地に新築された。全室個室、自宅での生活をイメージできるよう設えを工夫し、小規模施設ならではの個別ケア、役割活動や趣味活動も実施している。

サテライト蜻蛉では現場から、「職種で分業しているの、専門職としてその専門に特化して業務にあたることが大事」と声があったという。福本事務部長は、「現場の専門職は皆、おのおの役割を踏まえ、専門性を最大限に活かしたケアを行うことが重要と思っています。その上で多職種協働でご利用者の生活全体を支えていくのが鴻池荘のケアのかたちですね」と話す。

西田宗幹リハビリテーション部部长も多職種協働のよさを実感する1人だ。「鴻池荘とサテライト蜻蛉では、ご利用者の日常生活自立度に合わせたリハビリを提供し、能力に応じた活動量を保つメニューは介護職と協働で組み立て、展開しています。ご利用者が家へ帰れるようにという願いは、職員の皆が協働することで実現できているんですね。その結果が高い在宅復帰率、地域に根ざした施設というブランディングにつながっていると感じます」。

植田隆敏事務課長は「作業療法士として現場で働いた経験があるので、ご利用者と現場双方の視点を

もって仕事に携わっています。専門職だったので現場のがんばりもひしひしと感じますし、がんばりを加算につなげたいという思いも強いです。専門職を支える緑の下の方持ちとして、これからも現場感覚を大切にする事務方でいたいです」と抱負を述べる。

取材して感じたのは、皆が「利用者の立場に立つ」というマインドを共有していることだ。マインドをぶれずにもち、対話し連携することは、一見あたりまえに思えるが、続けるのは意外と難しい。しかし鴻池荘は開設から37年、あたりまえのケアを続け、進化を遂げてきた。

「2012年2月に全老健が公表した『2025年のあるべき「介護老人保健施設」の姿』で示された方向性に沿って、老健施設を“中間施設”から地域包括ケアシステムの中核施設へ進化させることを一貫してめざしてきました。利用者本位で地域のニーズに応える——その基本に忠実に実践を積み重ねてきました。現在の鴻池荘はその姿に合致していると考えています」と平井理事長。

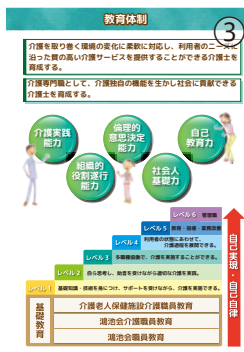
老健施設のあるべき姿を追求しつつ、ぶれない軸をもつことがいまの時代に求められていることなのではないだろうか。



①



②



③



④

①レッドコードなどリハビリ機器が備えられた鴻池荘のリハビリスペース。利用者は能力に合ったプログラムに取り組む。②「あなたの健康相談会」は2025年開始の新たな取り組み。地域と連携し、認知症の早期発見や生活習慣改善などをめざす。③2018年から「鴻池会介護職員ラダー教育」をはじめ、職員が生き生きと介護に携われるよう支援している。④サテライト蜻蛉外観。蜻蛉の名は神武天皇が連なった山を蜻蛉にたとえたのにちなむ。